



＜同志社人が母校を誇りに思える情報＞
「同志社ファン・レポート」 Ver. 2-042 号（通巻 273 号）

「新島襄の青春」 -3-

同志社大学名誉教授 伊藤彌彦氏



S. H.テイラー船長と新島襄

（お断り：「航海日記」「箱楯よりの略記」の年月日の表記は、和暦表記で始まる。元治元年十一月一日〔1864年11月28日月曜日〕からは和暦と西暦の混用が始まり、元治二年〔慶應元年〕一月三十日〔1865年2月25日〕から西暦表示のみになった。ただし、船上での新島は和暦の計算を何度か間違い、実際の和暦とは順次数日の誤差がでていた。本稿では、誤差を含む和暦表示のままの日付を、機械的に西暦に換算して表示することにする。）

はじめに

幕末の新島襄に精神革命をもたらした3冊の洋書があった、という。大統領を選挙で決める制度を伝える『聯邦志略』、和訳『ロビンソン・クルーソー』、「天父」の観念を教えた漢訳聖書の抜粋、である（井上勝也『新島襄 人と思想』124-125頁）。

それならばアメリカで政治学を専攻してもよさそうだが、新島はキリスト教に開眼した。とくにアメリカ上陸に際してハーディー宛に書いた作文「日本脱出の理由」には本格的な求道者の姿がみられる。かつて函館に行く道中では、遊女の所で散財して有り金のほとんどを失う失態を演じたあの青年が、である。キリスト教への関心がいつ、なぜこれほど増大したのか。やはりこれも航海中に新島自身が内面的変容（メタモルフォーゼ）を遂げたからであろう、それ以外の機会があったとは考えにくいからである。ただ、「航海日記」を読んでみても、キリスト教に関する記述は少ない。それで大胆な仮説として、「テイラー船長の人格が影響した」を立ててみた。

ある人間がある宗教に入信する時には、その宗教の原理、説く人の人格、社会集団としての存在性、のどれかへの共鳴や利害関心が作用すると考えられる。ここで浮上するのは

テイラー船長という人格である。ワイルド・ローヴァー号での一年余りの新島襄の生活は船長室付きの雑用係であった。船長と日常の時間、空間を共にしたのである。そこで目撃した船長の振舞いはアメリカ文明の生き証人、近代市民の良きモデルであった。信仰もあり能力も高い良質のニューイングランドの市民である船長から、アメリカ文明の感化を知らず知らずに受けて生活した。まして憧れのアメリカ文化である。そのテイラー船長はバプティスト派（同上書、33 ページ）だというのが、聖職者ではない。いわば「在家の信徒」である。このこともかえって良かったのではないか。お説教臭い教導ではなく無言の感化によって自然体で影響をうけたのではないか。そして宗教的人間である新島襄側からはキリスト教に関する質疑がなされ、キリス教意識が育っていったのではないか。

・航海中のキリスト教への言及

「航海日記」におけるキリスト教関係の記述は少しだけである。

まずベルリン号乗船 11 日目の元治元年六月二十五日（1864 年 7 月 28 日）、

「今日セーロル〔セイラー〕より借りたる耶蘇經典を読む事、少し計りなり。実に帰郷の上、再び父母に逢いたる心地、恰もかくの如きかと思われ、心の喜び斜めならず」（『新島襄自伝』岩波文庫、106 頁）とある。以前わたしは、この時「天父」を初めて知ったと書いたが（「アメリカの新島襄」『明治思想史の一断面』70 頁）、井上勝也先生の説によって訂正しておく。

借りた英文聖書を読んで「天父」と再会したのであろう。最初、漢訳聖書抜粋で出会った時の「天父」は、実父との絆を超越する論理として機能したが、今密航中の船で「天父」を再見した時は、実の両親を想起する機能を果たしたのである。

次の記述はワイルド・ローヴァー号船上でのもので、

八月九日（1864 年 9 月 21 日） 半〔晴〕

甲比丹、予にバイブルを与へり（「航海日記」『新島襄自伝』、113 頁）。

ワイルド・ローヴァー号に乗って 41 日目の出来事である。ここでなぜ聖書をプレゼントしたのか。船長が宣教しようとしたのか。むしろ新島がキリスト教についてのナイーブな質問を次々するので、神学者でもない船長は回答しきれなくなって、バイブルを自分で読むようにと与えたのではないか。ともかく、それまでに二人の間でキリスト教についての会話が進行していて、新島襄の本気度を感じたからであろう。

次に、

十一月八日（1864 年 12 月 6 日） Monday

今日、我れ余の小刀を八元にて甲比丹に売却す（同、116 頁）とある。

この詳細は、「香港で中国語の新訳聖書を一冊買ったかったが、持っていた日本のお金が通用しないことがわかった。そこで船長に小刀を八ドルで買ってもらいたい、と頼んだ。その金を手にいれたからしばらくして、船長は私が中国人の給仕と一緒に市内見物のために上陸する許可をくれた。それで私は中国人の書店で新訳聖書を購入する好機を得た」（「私の若き日々」『新島襄自伝』68頁）とある。

つまり、小刀手放した理由は、香港で漢訳聖書を買うためであった。その頃の新島の英語力では理解できない文章が多かったので漢訳聖書が必要になったのではないだろうか。

それにしても武士の魂といわれる刀を手放して聖書を買うことは象徴的である。過去の武士世界からの決別と新しく西洋文明社会への参入、新島襄の変身を象徴する出来事であった。

以上の数少ない航海中のキリスト教関係の記述から推定されるのは、テイラー船長と新島との間で、キリスト教に関するコミュニケーションが継続的に存在したことである。船長との間でキリスト教そして信仰に関しての疑問がかなり交わされていたに違いなく、それがやがて「日本脱出の理由」の作文の内容に反映されたはずである。

アメリカ上陸時の所持品リストには書籍類7冊が挙げられていたが、その内の2冊はこれらの聖書で、新島の英語読解力は英訳聖書と漢訳聖書の併読で高められたと考えられる。もしこの現物があるならば、その書き込みは、新島の信仰と英語力の進展を追跡する貴重な資料となろう。

・テイラー船長

Horace S. Taylor (1829.10.17~1869.12.11)船長と新島襄の間柄を考えてみる。

「此の船頭は甚立派なる人にして、恰も画きたる関羽の如し。船頭吾を呼てジョーゼフと名く、且つ吾に船頭部屋の掃除及び給仕等の役目を言付けり」（「箱楯よりの略記」、『新島襄全集5』73-74頁）。

テイラーは立派なあごひげを蓄えていたから関羽髯の武将を連想したのであろう。しかし21歳の新島が出会った時、テイラーはまだ34歳であった。兄貴のような存在だったと回想している。

さて「航海日記」のなかで書かれた英語に注目してみた。曜日、地名、人名などの単語レベルの表記は散見できる。きれいで正確な英文は、7月11日に3文と8月11日に2文あるのみである。前者はワイルド・ローヴァー号乗船二日目ですべて最初に、I shall call your name joe. とある。船長の言葉を忠実に筆記した個所とおもわれる。

テイラー船長は新島をファースト・ネームで呼んだことが分かる。新島は船長をどう呼んでいたのだろうか。キャプテン・テイラーだろうか。いずれにせよタテ社会の人間関係にドブプリ浸かって育った新島青年が、年齢差に関係なくファースト・ネームで呼び合うアメリカ社会の人間関係の風通しの良さに、ほどなく気付いたはずである。

後年書かれた半生記の中に船上生活の様子が手際よく書かれている。

「航海中の私の仕事は船長の食事の給仕をし、船室をきちんと整えることなどであった。船長の仕事がない時は、よく〔マストの〕綱を引く仕事もした。航海中最も楽しかったことは、船長とともに毎日、船の位置を計測することであった。彼は私には非常に親切で、自分の弟のように接してくれた。私に対して一度も意地の悪い言葉を吐かなかった。

船中の誰もが、私に気持ちよく接してくれた。私は船首にある水夫部屋へ行って船員たちに会いたい、とよく思ったが、許してもらえなかった」（「私の若き日々」『新島襄自伝』69－70頁）。

テイラー船長は、新島が優れた青年であることを見抜いた。新島が航海術を心得ていて、数学もよくできることも知る。サイン、コサインを用いた計算もできたので、テイラー船長と測定値から船の位置を計算する競争を楽しんだりして、時間を過ごしていた。これまであまり言われていなかったが、私は、船長室付きとなった新島がこのテイラー船長と一年以上暮らした意味は大きかったと思う。信仰もあり能力も高い良質のニューイングランドの市民である船長から、アメリカ文明の感化を知らずしらずに受け、二人は得難い人間関係を築いたのであった。

ボストン入港後、船長は早々に実家に帰ったりしたが、入国できない新島は悶々とした時間を3カ月近く船内で過ごすことになった。この頃と思うが、新島襄がテイラー船長に密かに持ちかけた嘆願メモが残っている。それはA.ハーディー氏の眼に触れないようにテイラー家に保管されていたが、17年後テイラー船長未亡人から、ハーディー家に渡されたものである（『新島襄全集6』370頁、日本語訳は『新島襄全集10』18-20頁）。

素朴な英文で書かれたその中身は、アメリカで学校に行くという密航の「大目的を達成」するために、この船の持主のハーディー氏に、衣食と学費など少なくとも一カ月に20ドルの援助を受けながら、その対価としての労働を求められないで勉学時間を確保してもらえるよう、働きかけてほしい。この件では「あなた以外に私を救って下さる人は誰もいません」云々、と嘆願したものである。

さらにこのメモで注目になるのは、もし大目的を実現できたならば、自分は「死んで墓に埋められた時も、私の魂は天国へ行き、神様にあなたのことを報告し、神が真実をもってあなたを祝福なさるよういたします」と、キリスト教的言質で埋められていることである。いつしかテイラー船長と新島襄は信仰を共有する次元に達していたのである。

・「日本脱出の理由」はアメリカ入国用のエントリー・シート

さて新島襄がアメリカ入国に成功してハーディー家の庇護を受けることになる件についてこれまでの通説では、船主のハーディー氏がワイルド・ローヴァー号の点検に来た際に、新島は志を述べたが英語が通じなかった。そこで船員宿に泊まらせて3日間である「日本脱出の理由」の作文を書き上げさせた。その出来栄えに感心して新島を引き受けることにした、という話である。

ただ近年は、この話の真実性が揺らいできており、私もこれは脚色されすぎた話だと感じている。この話が生まれたのは、A. S. ハーディー 『新島襄の生涯と手紙』の中の次の記述である。

「ボストン到着ののちしばらくしてテイラー船長は船の持主に対し、独りの日本青年を連れてきたこと、その男はしきりに教育を受けたがっていることを報告した。…航海中に彼は船で使う単語は覚えたのであったが、自分の意思を通じるような英語で伝えることはまだできなかった。…そこで新島はひとまず海員ホームに送られ、何故祖国を脱出することになったのか、その理由を綴るよう求められた。十月十一日にハーディー氏は次のような手記を受取った」(『新島襄全集 10』 10-11 頁)。この記述にしたがえば 10 月 11 日以前に海員ホームで執筆した、ことでなければならぬが、それは新島襄の「航海日記」と食い違っているのである。

A. S. ハーディーの伝記本の記述には注意が必要である。この本には、ここにしか存在しない新島襄の書簡や日記のオリジナル資料が収録されている点で重要である。しかし同時に、その解説や解釈の文章には不明瞭な記述も散見されるのである。その点については『新島襄全集 10』に掲げる日本語訳を担当された北垣宗治教授も「解題」で語っておられる。

事実はテイラー船長の筆が加わってできた作文が「日本脱出の理由」だ、と私は推定している。それを思わせる状況証拠を挙げておこう。第一に、10 月 11 日は下船し、テイラー船長とも別れ、ハーディー家の引き受けが決まっていた日であった。その後直接ハーディー家に行かず海員ホームで3日間過ごしただけで作文は既に渡していたのである。第二に、テイラー船長としても新島の密出国を引き受けたからには、何とか無事にアメリカに上陸させないといけない責任があった。また新島の人柄を知って、入国させるに相応しい青年とテイラーも判断していたからである。第三に、先述した新島襄がテイラー船長に密かに持ちかけた嘆願メモの文言が洗練した英語となって「日本脱出の理由」に使われているからである。テイラーが修飾したと思われる。具体例については、拙書『明治思想史の一断面——新島襄・徳富蘆花そして蘇峰』、69 頁を参照されたい。第四に、テイラーは船主ハーディーの人物をよく知っていたから、どう訴えると効果的かを心得ていた。大変熱

心な新教徒であるハーディーの泣き所をつく作文をテイラー船長は添削指導したのである。

つまり「日本脱出の理由」では、新島は江戸を発つときからキリスト教を求めている、と強調して書かれている。「私の心は、英語の聖書を読みたいという思いに満たされていたので箱館〔函館〕に行き、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を見つけようと決意した。(中略)私は箱館行き洋式帆船に乗りこんだ。箱館に到着して適当な英語の教師を探したが、八方手をつくしても見つけれなかった。そこで私の心は一転して、国外脱出を考えるに至った」(『新島襄自伝』 24-25頁)と。

あまりにも完璧なキリスト教求道者としての旅姿である。これは新島において、自己欺瞞ではないにせよ、かなり誇張されている。函館行き途中で、遊女と出会い大金を失った事実とはあまりにも違う話である。今日でも大学生が就職活動でエントリー・シートを書く時には、相手企業をもち上げ、自分の動機を企業向きに美化強調するが、新島にとって「日本脱出の理由」はアメリカ入国のためのエントリー・シートであった。結果としてこの作文は大成功し、ハーディー氏の心を捉え、アメリカ入国を実現させたのであった。

◆結びにかえて

アメリカ入国後も、新島襄はテイラー船長一家とは家族の一員のように交流していた。フィリプス・アカデミーに在学した1866年の最初の夏休みには、テイラー船長みずから新島をアンドーヴァーまで迎えに行き、チャタムの実家で過ごさせていた。その年の10月、テイラーが中国に出帆する直前には、新島をボストンに呼び出し、歓談の後、上等の外套と帽子を買い与えた。1867年の夏休みは、テイラー船長の実父の家で過ごした。1869年4月28日にはテイラー船長の両親の金婚式に招かれて一泊した。そして1869年夏休みもテイラー家で海遊びなどを満喫したのであった。

その4か月後、悲劇が起こる。テイラー船長が不慮の事故で急死したのである、享年40歳であった。それを知った時の新島の衝撃の大きさは以下の日記になまなましい。「一八六九年十二月十三日、月曜日朝の事だった。ひとりの子供が黄色い紙片を持ってきて、手短かに宛名人をたしかめた。それはテイラー船長の死を知らせる電報だった。非常に驚いた。どうしていいかわからなかった。全然口がきけなかった。椅子に掛けたまま、『こんなことは信じられない。夢だ。そんなはずはない。ありえないことだ』とつぶやいていた。涙も、言葉も出なかった。…でも船長のきょうだいたちに出会った時、大声で泣き出してしまった。…はげしく泣くのみだった。船長がなぜ私にとってかけがえのない人であったかを、どう表現したらよいただろう。私はシャンハイで彼の親切な手でうけとめられたのであった。シナ服を与えた上、縫い方を教えてくれた。航海術も教えてくれた。辛抱強く話しかけてくれたし、いつも私のあやまちを許してくれた。私にひどい言葉をかけたことは一度もなかった。それ以降私の親代わりとなって下さった方に私を紹介してくれたのも

船長だった」（『新島襄の生涯と手紙』『新島襄全集 10』107-108頁）。それほどテイラー船長は大きな存在だったのである。

以上、3回にわたる新島襄の青春についての連載で、私は旅とお金のこと、およびテイラー船長の影響、の2つの新しい切り口で新島襄論を試みてみた。

幕末という時代は、もっとも意欲的でもっとも良質な青年たちを逸脱行動に走らせた時代であった。このような行動に出られるのは青年の特権である。新島襄もそのようなひとりで、試練を覚悟し不安におびえながらも、決然と未知の深みに漕ぎ出していった。破たんの可能性をはらみながら「密出国」という人生を賭けた実存的な旅に出発したのであった。その新島襄において出国時の恩人はベルリン号のセイヴォリー船長であり、アメリカ入国時の恩人はワイルド・ローヴァー号のテイラー船長であった。（完）